



Title	『日本の哺乳類 改訂版』 阿部永 [監修] (東海大学出版会, 2005年, 206頁, 6500円)
Author(s)	大館, 智氏
Citation	哺乳類科学, 46(1), 140-141
Issue Date	2006
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44415
Type	column
Note	書評
File Information	MS46-1_140-141.pdf



[Instructions for use](#)

『日本の哺乳類 改訂版』

阿部 永 [監修] (東海大学出版会, 2005年, 206頁, 6500円)

まず手にして (する前から?) の印象は、初版と大きく異なり、一見すると全く別の本に見えることである。それは大判になったこととハード・カバーになったことが関連している。また表紙の写真も木に登るツキノワグマから花を食べるヤマネに代わったことも関係しているだろう。

このような外見上の変更のみならず、中身もいくつかの点で代わっている。第一に英語の記述を日本語と並列した点。今回のバージョンで大判化した最大の理由はここにあるのだろう。これによって、外国人も日本の哺乳類についての情報を得ることができるようになった点は大きく評価できる。しかし、バイリンガルな書物は読む側からすると、あまり良い印象がないのが一般的だ。英語を読めない人は英語、日本語が読めない人は日本語の部分の多くが無意味な情報となる。英仏両語併記のカナダの公文書のウザツたさと同じだ (森林資源豊富なカナダだからこそ、紙の無駄遣いのような環境問題は政治的問題よりも些細な問題なのだ?)。大判化で価格が上

がったとすると、金欠の学生等にとってはつらいものがある。良い点をあげれば、英語の論文で引用文献としてこの本を引用した場合、外国人が原著に実際にあたって (買って) みよう、という気が起こることであろうか。例えば、フィンランド語の本が論文で引用されていたので、その本を買ってみたが、ちっとも内容がわからない、というような苦い経験は無くなるだろう。もっとも多くの外国人にとっては、日本の哺乳類全体についての知識を得ようとする、他に選択の余地がないので買わざるを得ないが、今回の日本語・英語併記形式は賛否両論であろう。また利用されている動物の写真については、可能な限り他のものにさし替わっている。これについては前のほうが良かったという意見も聞かれるが、両方の版を持っているものにとっては新しい画像情報なので得した気分だ。

次に内容に移ろう。分類学や系統学の進展により初版とは分類学的扱いがいくつか代わった。たとえば初版では独立種とされたサドトガリネズミが改訂版ではシントウトガリネズミの亜種とされ、反対に同種とされていたエチゴモグラがサドモグラと別種とされている。しかし、食虫目 (Insectivora) については、分子系統により多系統であることが明白となった現在、この目名を使い続けるのは、問題であろう (といってもモグラやトガリネズミ、ハリネズミを何目とするかは、研究者によって統一見解がないのが現状ではあるが)。

また記述内容については若干変更されたところもあるが、基本的には前のバージョンと同じである。これによって、外見は全く違うが確かにこの本は初版の別版なのだということに納得がいく。辛口にいえば進歩がない。実際は初版以降多くの研究によりかなりのことが解明したにもかかわらず、生態等についての情報の更新があまり見られないのは残念である。従って、初版と同様、分布情報や検索表以外の '研究に引用可能な' 記述は少ない。

一方、私がホッとしたのは、初版での 'ネズミ目' や 'ウシ目' などの代表動物を使ったカタカナの目 (order) 名を、研究者が常用している漢語の齧歯目や偶蹄目などの表記に代えたことである (括弧付きでのカタカナ目名の使用には異論はない)。曲がりなりにも漢語を使うことのできる日本人は幸いである。これが欧米語だと Rodentia や Artiodactyla などを用いるので、ラテン語やギリシャ語の知識がないと意味がわからない。欧米の一般人はこういった学名を聞いても理解不能の場合が多いが、日本語の場合は漢字の文字そのものに意味があるので何となく内容の理解ができる。日本で教育を受けてよ

かった！（と、文部科学省のメンツもたてておかないと）。改訂版は‘ゆとり教育’なる愚民化政策に対抗して、学者の良識ある立場を堅持していて痛快だ。

以上のように、プロの研究者や日本語のできない読者にとって、この改訂版は初版とともに必需品である。是非とも購入を勧める。しかし、先ほども述べたように、それほどの記述情報の改訂がなく、果たして金のない人に対しては、是非とも買え、と勧められるかは疑問である。この内容なら初版でも十分であったし、必要ならば、どこからか本を借りればすむことだ。また、一般向けには『フィールドベスト図鑑 日本の哺乳類』（小宮輝之 [著], 学研）のほうが見やすいし、研究者向けには、古典である『原色日本哺乳類図鑑』（今泉吉典 [著], 保育社）や頭骨に限っては『日本産哺乳類頭骨図説』（阿部 永 [著], 北海道大学図書刊行会）といった良書がある。今回の改訂版は、これらの中間的位置づけで、曖昧な感をぬぐいきれない。こう書いてくると、じゃあ買わないという人がいるかもしれないが、そう結論づけるのはまだ早い。今のところ入門書としてはこれしかないので、実際は買ったほうがよいのが現状である。将来、よりよい日本の哺乳類についての本の出版が望まれる。

大館智氏（北海道大学低温科学研究所）

✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp